庭付き4LDK中古住宅※リフォーム済嫁付

エスキユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
庭付き４ＬＤＫ中古住宅※リフォーム済嫁付

【Ｎコード】
Ｎ５６３２Ｚ

【作者名】
エスキュ

【あらすじ】
宝くじで一億当たったから、マンション買ったので、この家、リフォームして売りました！――母親の爆弾発言に唖然としながらも引っ越しがいつなのか聞いたら、「珠希付きで売りました」と言われた私。どうやら、家ごと売り飛ばされたらしい。ええ？！　本気、お母さん！？　やってきたのは大きな犬を連れた草食系の年上男性。私、本当に結婚しちゃうの？？☆☆☆全１０話の中編となります。（年内完結）お暇なときにでもどうぞ。タグの通りの作品なので恋愛要素は低めです。ご注意ください。

プロローグ　いつまでもあると思うな、親と金

「お母さん、宝くじ、当たっちゃった！」
御歳６０の母君は、キャハっ☆と気持ち悪い声をあげながら、三十路突入したばかりの一人娘の私にそう言った。
「何？　１万でも当たったの？」
私は冷蔵庫から牛乳を取り出しながら、そう問いかける。少しでも背が伸びてほしいと幼稚園から牛乳のんで２６年。残念ながら育ったのは胸だけだ。
若い頃は１５０センチに満たない身長と、Ｆカップでロリ巨乳なんて言われたが、女も３０過ぎれば、ロリなんて付くわけもなく、
「お前って残念な女だよな」と同情される始末だ。
好きで結婚しないわけじゃない。
男を見る目がないだけだ！
と内心、自分を落としながらも牛乳を飲んだ瞬間、母親の一言は正に爆弾だった。

「当たったのは一億☆」

ぶーー！！

「そのお金でマンション買っちゃったから、お父さんとお母さん、この家出ていくね☆」

ぶーーーー！！

「この家は、リフォームします。そして売ります。あ、買い手はついてるのよ♪」

「ついてるじゃないよ！　そんないきなり言われても！　引っ越しいつよ！？」
口元を拭いつつ母を睨めば、母は笑いながら言う。
「あら、珠希は引っ越ししないわよ？」
「・・・・・・・・・・は？」
「珠希付きで、売りました」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ？」
一瞬、聞き間違えた。
凄く変な風に聞き間違えた。
そうでなければ、そんな人身売買紛いのことあり得る訳がない。
そう思っていた筈なのに、母は違ったらしい。
「来月から、珠希の旦那さんがくるから、珠希、仲良くしなさいね」
何、その、犬猫がきますみたいな軽いテンション。
私のテンション、急降下、だ！
「冗談だよね、お母さん？」
「冗談じゃないわよ、珠希」
母は満面の笑みだが、目が笑っていない。
「２８で会社の男に二股かけられて居辛くなって会社辞めたのは仕方ないわよね。
それからバイト初めて、彼氏出来たと思えば、ギャンブラーやら、フリーターやら、禄でもない男ばかり。しかも就職もできない」
「し、仕方ないじゃない！　三十路過ぎのスキルなし女なんて、雇ってくれる会社ないんだもの！」
「お見合いしろといっても、自分で選ぶとわがままばかり。しかも、

ましな男を選んでくるかと待てば毎回、金も稼げないバカばかり。
珠希、お勤めしていた頃の貯金、もうないわよね？」
「うっ！」

虎の子５００万は、毎年知り合う男どもに貢いでなくなった。
悲しいかな、私は現在、無職。２カ月前、バイト先の飲み屋の２５歳フリーターに二股駆けられ（しかも職場内で私の方が浮気相手だった）、退職したばかり。
この父の持ち家と、母のご飯で生き長らえていると言っても過言ではない。

「だから、お父さんとお母さんで、素敵な男性を見つけてきました。先週、夕飯食べにきた男の人、覚えてる？」
「え？　お父さんの会社の人？」
確かに珍しく来客があった。
いきなり夕飯を食べていくと言われて、私は渋々外にハンバーガーを食べに出かけたのだ。
流石に父の会社の人に、無職で家事手伝いのデカい娘がいるなんて、わざわざ顔合わせしたくない。
それでもチラリと挨拶だけはして、その時見た顔は、私より少し年上の落ち着いた男性に見えた。
銀色のフレームの眼鏡が印象に残っていた。
「あの人、お父さんの会社の人じゃないから」
「ま、まさか・・・」
「そう、珠希の旦那さんになる人よ」

くらり。

一瞬、目の前が暗くなった。
よく見ておけば良かったなんて、少ししか思ってない。

寧ろ、このじわじわとくる逃げ道のなさが怖い。
怖すぎる。

「お、お母さん、そこに私の意見は・・・？」
「お母さん、去年、お見合い持ってこようとしたとき、珠希に言われたわよね？
『来年までには彼氏くらい見つけてやる！』って」
「い、一応、彼氏できたじゃん！」
「あんた、彼女じゃなくて、セフレ扱いだったでしょ！」

じ、実の親にセフレ扱い。
もう、色々ダメージが多すぎた。

「だから、お母さん、この家付きであんたを売ることに決めました」
「き、決めましたって・・・・・」

いやいやいや！
宝くじ、当たったんでしょ、お母さん！
それ、私に分けてくれるとかないんですか？

色々、オロオロしながら母に言ったが、母は
容赦がなかった。
ピシャリと私が伸ばした手を叩くと言い放つ。

「いつまでもあると思うな、親と金！」

母よ、何で宝くじなんか当たった？！

1　婚姻届の書き方

「これに珠希さんの名前を書いて貰えれば、完了です」
そう、目の前の男は私に言った。
夕暮れ時、斜陽差し込む我が家のリビング。
今まであったテレビは地デジ対応の大きなテレビになっていたし、ソファも革張りだ。
古臭い家だったはずなのに、パッと見、大型家具量販店のモデルリビングみたいに綺麗だ。

リフォームは怒涛の勢いで行われた。
元々、築３０年に満たない家だったので、壁紙張り替えやら、システムキッチン入れ替え、ユニットバス入れ替えで済み、１ヶ月という有り得ない工程でも、すんなり終わってしまったらしい。一階だけ若干間取りが変わって、中だけ見たら新築の家みたいだ。
二階の私の部屋は一切手が加えられず、壁紙張り替えなどが父と母の寝室だけ行われて、昨日その部屋に大きなクインサイズのベッドが搬入された。

誰の？
一体、誰が寝るの？
なんて、怖くて聞けるか！！

「じゃ、呉々も晴哉くんに宜しくね！」
「・・・・・・・・珠希、頑張れ」
昨日、そう捨てぜりふを残して、父と母はこの家から車で１０分のマンションに帰っていった。リフォーム中、私もお邪魔したが、宝くじで買った割には極々普通の中古マンションだった。母のことだ、老後の蓄えに殆ど回しているのかもしれない。

それなら、何故にあの家を売る?!

と思ったが、二人が片付けたかったのは家じゃないことは、薄々感じてました。

家付きならば、売れるだろう。

そう踏んだ訳ですよね？　お父さん、お母さん・・・・・・

そして、今日。

「ワン！」

元気な声で挨拶してくれたのは、可愛いというよりデカいの一言の、ゴールデンレトリバーのワンちゃん。そしてワンちゃんは、スラリとした長身の男と一緒に現れた。

「カインです」

男は先に犬の名前を名乗り、愛おしげにカインの頭を撫でる。カインは尻尾をパタパタと嬉しそうに振っている。

「はあ」

「私は西永　晴哉と申します」

「えっと・・・田中　珠希です」

「じゃあ、明日からは西永　珠希ですね」

おぉっと、サラッと何か言いましたよ、この男。

私は顔をひきつらせながら、「本気ですか？」と問いかける。

今なら、冗談ですって言われても許す。

いや、そうであってほしい。

なのに、母同様、得体の知れない笑みを浮かべて、「すいません、カインを上がらせたいんで拭くもの貰えますか？」と逆に問われた。

男に罪はあっても犬に罪はない。
私が渋々、雑巾を持ってくると、「ありがとう」と言いながら、男は雑巾を受け取る。
長い指に節くれだった手。
父親とは全く違う、私の付き合ってきた歴代の男とも違う、綺麗な手だ。

まあ、手だけで嫁になるほど、私は安くないけどね！

そう思っていたら、いつの間にかカインと男に上がられて、いつの間にかリビングにつれてかれ、私の家なのにいつの間にか男にコーヒーを用意されていた。
「このコーヒーメーカーまで、用意して貰えて、お義父さんたちに感謝だな」
どうやら男のリクエストのコーヒーメーカーだったらしい。
私は？
私のリクエストはないんですか？
そう思えども、父も母もいないリビングで、私の味方は1人もいない。

というか、1ヶ月前にいわれてから、本日、二度目の顔合わせ。一回目なんか、挨拶しかしてないというのに、それで結婚なんて、私の両親はいかれてるだろう。
内心苦汁ながら、我が家なのに、だされたコーヒーに口をつける。
大変、美味しいです。
「珠希さんもブラックなんだ。コーヒーの趣味があいそうだね」
男が何か言ったが無視だ。無視。

犬は好きだから、こちらによってきたカインの頭は撫でてやる。嬉しそうに私の膝に乗ってきて何て可愛いんだろう、コイツ！

こういう大きな犬、飼ってみたかったんだよなあ、とぼんやり思っていたところで、冒頭の男のセリフに戻る。

男が差し出してきたのは婚姻届。

はい、私、この家と一緒に男に売られました！

「本気で我が家を私付きで買ったんですか？」
私が真顔で問いかけると、男はニッコリ笑って、
「はい」
と返事をした。
「いくらで？」
「私の将来性でかってくださったそうです」
「は？」
「将来、ご両親のうち、どちらかが亡くなられたときに面倒を見るのと、珠希さんを一生可愛がるって約束です。
だから、私の将来全部を珠希さんたち、ご家族に」
「・・・・・・・・・・・・・・」
リフォーム後、一階に出来た客間は、将来の親用だったのか。畳の部屋で、何でこんな仏壇でもおきそうな部屋をと思ったが、まさか自分たちの片割れの面倒までお願いするなんて・・・。

一瞬、目の前が真っ暗になった。
いや、比喩ではなく実際そうで、私の顔にカインが近づいて舐めてきたから真っ暗になったのだ。
私はカインをガシリと捕まえて、ワシャワシャその腹をかき混ぜながら、
「正気ですか？」
と今度は男の頭を疑う。
「正気ですよ。本当はカインと二人で暮らせる家を中古で探してた

んです。その時、お義母さんとお会いしまして、この家を薦められました」
「わ、私付きで？！」
「いえ、その時は家だけだったんですが、お話している内に、ならば自分の娘も付けたら家を譲ってくださるとおっしゃるので」

バカバカバカバカバカバカ。
お母さんの、大バカ！

どこの世界に、意気投合して娘を譲る母親がいるんだ！
ここにいます・・・・・・

私はぐったりしながら、カインの腹を撫でる。このもふもふが落ち着く。
男はそんな私を見ながら微笑んでいる。
「だからってまともに会話もしてない私と結婚なんて」
「お義母さんから珠希さんのことは聞いてます。とても素敵なお嬢さんだと思いましたし、私には勿体ないと思ったのです」

いえ、あなたの方が勿体ないです。
と思わず言いたくなった。

目前の男は、着ている服はカジュアルだが、どこかのブランドものらしいマークが胸元にワンポイントであしらわれていた。それだけでも金があると分かるが、眼鏡だって安売り眼鏡じゃない。さっき、横を歩いたとき見上げた眼鏡のつるにもブランドロゴがついていた。
だから、間違いなく金はあるはずなのだ。
そして、顔。
凄い美形ではないが、優しげで草食系男子って言葉が似合いそう

な面持ちだ。
性格だって、今話した限りでは、穏やかそうで、余程変な性癖でも無い限り、３５歳らしいが恋人がいないとは思えなかった。
そんなことを思っていたら、男が自分には勿体ない理由をあげてくる。
「実は私は2カ月前に離婚しています」
また、それは何で？と思っても、口にしないくらいの嗜みはあったのだが、男は勝手に話してくる。
「元妻との間には、子供がおらず、カインだけでした。私は父親が死別で、母は離婚して子供の頃に連絡を絶っておりまして。妻の家に婿入りしてました」
「婿入り・・・」
失礼だが、凄い似合っている、と思った。
元婿養子は話を続ける。
「しかし、両方異常はなかったのですが、なかなか子宝に恵まれず・・・。ですが2カ月前、妻が妊娠しまして」
「それはめでたいことじゃないですか」
「相手は妻の勤め先の男でした」
ど　こ　の　ド　ラ　マ　で　す　か？
あんぐりと開いた口が塞がらない私。
男は苦笑しながら、ことの顛末を語る。

生まれてくる子供の父親を正しくするために、早々に離婚。（それでも結婚期間中の妊娠だったので出産後に遺伝子鑑定とかして、元妻側で色々申請するらしい）
カインだけは男が引き取り、慰謝料などもなく円満離婚して、今にいたるらしい。

「いや、円満じゃないでしょ、それ！
あなた、もっと怒らないと！」
私がそう男に詰め寄ると、男はやんわりと微笑んで、
「私じゃ彼女を幸せに出来なかったから、仕方ないです」
と言った。

「そういう問題じゃないでしょう！
仮にも夫婦になったなら、不倫なんてする前にきちんと決着つけるべきだったでしょうよ！
子供できたから離婚って、馬鹿にするにも程がある！！」
私が息まくと、男はそんな私を見ながら、
「でも離婚したから、珠希さんと結婚できます」
と言ってきた。

そこでここに戻るか、普通？！

いや。もういきなり会ったばかりの女と結婚しようと思うんだから、どっかおかしいのだろう。

「私なんかでいいんですか？！　もう若くないし、無職ですよ？！」
「珠希さんだからいいと思いました。お義父さんたちもとてもいい人で、こんな人たちの育てた娘さんなら、私も幸せになれるかな、と思ってしまったんです」

う。卑怯です。

男の笑顔は切なげで、その顔には離婚までの道筋が決して円満ではなかったことを物語っていた。

そんな男が、私の両親を見て、私の両親に幸せを見いだすって、どんだけ寂しかったんだろう、と思わずにはいられない。

お母さん、あなた計りましたね？

と、内心、母に向かって問いかける。返事があるわけないが、母は私を育てただけあって、私の性格も熟知しているのだ。

離婚歴がなんだ。

人柄だ。

愛情だ。

そんなことをのたまう母の顔がすんなり思い浮かぶ。

私の男を見る目のなさも、この情けに弱いところに起因しているといい加減、分かれ、と母に言いたい。

いや、分かっているから、こうなのか？

「私と結婚したいんですか？」

「珠希さんと結婚したいんです」

目の前には紙切れ一枚。

ご丁寧に私の名前を記入するのみだ。

というか、証人欄に既に私の父の名前が書いてある。男の方にも見たことない男性の名前が書いてある。きっと友人か誰か信頼できる人なのだろう。

準備は万端らしい。

私はため息をつくと、ワシャワシャワシャワシャとひたすらカインを撫で回した。

「カイン、可愛いですね」

「実物の珠希さんも可愛いと思いました」

「その甘い言葉は仕様ですか？」

「はい。珠希さんを一生、可愛がるってご両親と約束しましたから」

情に流されるな、と誰かが私の中で警告したが、そんな警告で何とか成る性格だったら、とっくの昔に結婚してるわ！

私は無言でペンを持つと、自分の名前を婚姻届に記入した。

男が嬉しそうに微笑んでくる。

本当に嬉しそうだ。

「宜しくお願いします、珠希さん」

「・・・・・・・・・・宜しくお願いします、晴哉さん」

その日、私は結婚することになった。

バツイチ、犬付き男と。

（明日から）田中改め西永　珠希、３０歳。

どうなる、私？
どうする、私？！

1　婚姻届の書き方（後書き）

婚姻届の書き方、本籍の移し方などを詳しくお知りになりたい方は、最寄りの市役所にお問い合わせください。

思いたって結婚しようとしても、日本では、本籍外の役所にての申請は手間がかかります。

2　結婚って

「私の私物は明日の午後に届くので、午前中の内に届けを出して、買い物しましょう」
簡単に私が作った夕飯後、晴哉さんがそう言った。
いってらっしゃい、と思ったが、多分、私も一緒なんだろうなぁ。
明日にはこの男と夫婦になる。
そう思うと何だか変な感じだ。
お互いのことを直接知らなくても、結婚って出来てしまうんだな、と思ってしまう。
若い頃はもっと夢見ていたし、三十路になった最近は焦りもしていたから、凄く大変なことのような気がしていたが、いざするとなると、紙切れ一枚、役所に出せば済むのだから、凄いと思う。
そう言えば晴哉さんは、以前どこに住んでいたのだろうか、と婚姻届を見てみると、二人とも同じこの家の住所になっていた。
「あれ？　どうして住所が一緒なんですか？」
「今日、こちらに来る前に住民票の異動をしてきました」
「何でまた？」
「その方が明日の手続きも早くなるんです」
よく分からないが、本籍とか住民票とかの処理をしてからの方が早いらしい。そう言えば、この前結婚した友人は、旦那が他県の人で、戸籍を取り寄せてなかったから書類不備で入籍したい日に入籍出来なかったなんて言っていた。
「私たちの書類ってこれだけで大丈夫なんですか？」
「後は私の転籍届です」
「転籍届、ですか？」

「戸籍にバツがついてるんで、こちらを本籍にさせてもらいました」
「そうするとどうなるんですか？」
「私の戸籍に珠希さんが入るとき、バツが見えなくなってます。追っていけば分かるんですが、珠希さんも初婚ですし、綺麗な戸籍で迎えたいと思いまして」
「はあ・・・・・・」
離婚すると戸籍にバツがついてるのか、とか、本籍移せば、バツが見えなくなるとか、ちょっと知りたくない知識を知った気がする。
「あ、でも珠希さんの戸籍にバツをつけることは決してしませんから、安心してください」
ニコリと晴哉さんは紳士的に微笑んだ。
「家計のこととか、色々珠希さんにお願いしていくことになりますが、どうぞ宜しくお願いします」
あぁ、結婚したら、そういうことも管理してかないとならないのかぁ、と思った。
何か、結婚って、本当、夢見るだけじゃ駄目なんだな。
生活していく為に、色んなことをしていかなくちゃならないってことに、改めて気づかされたけど、今更「なしで！」って訳にもいかないだろう。

だって、この人、喜んでるよね？

たった二回しか会ってない私との結婚。
不安とか全くなく、嬉しそうにニコニコしてる。
その笑顔を見てると、無しにはできないよなぁ、と思う。

「ところで珠希さん」
「はい」
「今晩はこちらに泊まってもいいでしょうか？
」

やんわりとオブラートに包まれた言い方に、ドキリとする。
そうか、明日から夫婦だもんね、

やることだってやるよね！

今更、処女でもあるまいし、出し惜しみするつもりもない。
目の前の男がありかなしかで言えば、流石、我が母の眼鏡にかなったただけあって、私、十分、イケます。

「ど、どうぞ。明日から夫婦なんですから、遠慮しないでください」
「寝る部屋って・・・・」
「夫婦の寝室が、既にリフォーム済みであります」
「え？」
「はい？」
晴哉さんは目を大きく見開いてから、恥ずかしそうに「あ、すいません」と謝ってきた。
「あの、ですね。
特に他意はなくて、ただ、カインに早くなれて貰いたくて・・・・・」

犬の為かい！！

カアア、と頬が赤くなる。
勘違いした自分がたまらなく恥ずかしい。
というか、イケるとか考えた私、マジで最低だ。

目も合わせられず俯いた私をどう思ったのか、晴哉さんは優しい声で言う。

「珠希さん、ゆっくりでいいですよ」

「はい？」
顔をあげると晴哉さんの穏やかな笑顔と目が合った。
晴哉さん、本当に草食系だな。
笑顔が神々しい。

「ゆっくり、夫婦になっていきましょう」
「ゆっくり、ですか？」
「はい。目を合わせて会話をして、お互いを知って、手をつなぎましょう。
夫婦になることが先だけど、そこから始まる愛情があっても、私はいいと思います」

優しい声に、情欲なんてものは全くなく。
寧ろ、熟年夫婦のような穏やかな物言いに、私も気がついたらほほえみ返していた。

凄くドキドキするわけでもない。
ただ、いい人だな、と心がほっこりした。

そして、この人と結婚したら、きっとお爺ちゃんお婆ちゃんになっても、こんな風に穏やかに会話が出来るだろうな、と未来が想像出来てしまった。

今までの彼氏と、結婚とか、新婚の未来（ゆめ）は想像したけれど、老後を想像したのなんて初めてで、でもそれが全然、嫌じゃない。

「お爺ちゃんお婆ちゃんになっても、こんな感じですか？」
思ったことを口にしてみると、馬鹿にした声が返ってくることは決してない。
晴哉さんは寧ろ私の問い掛けがとても嬉しかったらしく、更に口

元を緩めて笑みを浮かべてくれる。

「いいですね。お爺ちゃんお婆ちゃんになってもこんな風に、のんびり日だまりで珠希さんとお話したいですね」

その言葉が穏やかで、その想像した未来があんまりにも穏やかで、思わずにっこり微笑んでしまった。

私が今まで結婚出来なかった理由が分かった。

結婚って、生活で、

そして、

未来を想像できる人としないと駄目なんだ。

3　指輪

「おめでとうございます」
朝一で届け出を出したら、市役所の人にそう言われた。月曜の朝一番。昨日、遊び疲れしましたか、おにいちゃん、なんて私は内心思いながらも、「はぁ」と曖昧に返した。

カインは家の中で大人しくお留守番だ。
晴哉さんとの初めて二人きりでしたことが、婚姻届提出だなんて、色んな意味で、私、劇的すぎるだろう。
「これで西永　珠希ですね」
「よ、宜しくお願いします」
「此方こそ宜しくお願いします」
差し出された手に、握手かと思って手を差し出せば、そのまま繋いで晴哉さんは歩き始める。
いい歳して手を繋いで歩くなんて恥ずかしくないの？
なんて私の視線は全く気付かれない。

何というか、私の旦那様になった人は見た目以上にマイペースなようだ。

「この後、警察署にいって免許の書き換えですね」
「あ、だから住民票と戸籍抄本が必要なんですか」
「珠希さんは名字も変わりますからね」
流石、二度め。
色々詳しいな、と思っていたら、晴哉さんははにかみながら、
「日曜日に住民票の移動がてら聞いといたんです」
と返してくれた。
「最近は市役所も土日に簡単な受付はしてくれるから助かりますね」

成る程。
わざわざ調べてくれていたらしい。
邪推してすいません、と内心謝りながら、晴哉さんの車に乗り込む。警察署にこのまま移動するからだ。
晴哉さんの車は7人乗りタイプだが、犬も乗れるように後部座席がフラットになっている。だから、私は助手席に座る。
きっとこの車は犬用に買ったんだろうな、と思った。
「カインのこと、可愛がってるんですね」
何の気なしにそう言えば、
「珠希さんが犬嫌いでなくて良かったです」
と運転しながらほほえまれた。
「犬嫌いの人は、匂いで駄目ですから」
「カイン、匂わないと思いますが」
「犬が苦手な人には敏感に分かってしまうんですよ。獣臭さが。
だから、カインを家にあげるときも抵抗なくあげてくれて、カインみたいな大型犬でも臆さず接してくれる珠希さんのような人は貴重なんですよ」
お、無自覚に彼の中で私の好感度は上がっていたらしい。
「カインは私にとって子供のようなものですから」
子供がいなかったという晴哉さん。
カインに向けられる愛情が深いのは、見ているだけで分かった。
「な、なるべく私も子供みたいに接した方がいいですか？」
晴哉さんにとって子供なら、結婚した私にとっても子供だろう。
そう思って言ったら、晴哉さんは首を横に振った。
「珠希さんには、家族と思ってもらえるだけで十分です。
それに私たちに子供が出来るかもしれませんから、その時、犬と子供の序列をきちんと
しなければなりませんし」
うおう。
サラリと爆弾発言。

やることやってないのに言いますね。
思わず俯いてしまうと、晴哉さんは小さく笑ってから、
「ゆっくり家族になりましょう」
ともう一度、言ってくれた。

今まで子供がいる自分なんて想像したことさえなかった。
ただ、淡々と毎日が変わらず過ぎていくと思っていたから、晴哉さんが来てからのこの二日は、何だか凄く目まぐるしい。
普通はもっとゆっくり慣れていくだろうに、それがないからだろうか。
本当に、ぐるぐる、ぐるぐる超高速回転のティーカップに乗っているみたいな気分だ。

警察署での手続きは、することを知っていたせいか、すんなりと終わった。
それでも１０時半は過ぎたので、そのまま帰るのかと思ったら、買い物があると言われた。

そして連れていかれたのは、最近出来た郊外型店舗集合施設。
きっと日用品が足らないんだろうと、テレテレ後をついていったら、ついた場所は宝飾店だった。

「へ？　え？」
「すいません、いきなり連れてきて」
「西永様、お待たせしました」
お店の人が出てきて出されたのは、指輪。
「あ、あのー、晴哉さん？」
「本当は一緒に選びたかったんですが、お義父さん、お義母さんが選んでくれまして」
苦笑いする晴哉さん。

あー・・・、お母さんが無理やり晴哉さんを連れてきて決めている姿が目に浮かびます。
お母さん、こういうのは娘に決めさせてよ。
と内心愚痴りはしたが、次の瞬間、サプライズがきた。
「だけど、婚約指輪は決めてなかったので、珠希さん、好きなのを選んでください」
「え？」
晴哉さんはニッコリ笑って、
「婚約指輪位、珠希さんの好きな指輪をどうぞ」
と言った。
「ええ？！　いや、そんな！」
「結婚指輪と重ねづけできるのもあるようですよ。お義母さんが選んだ結婚指輪、ラインが綺麗ですから、どの指輪とも合いますよ」
「は、はあ・・・・・」
ずらりと並んだ指輪を端から見ていく。
一番手前にあるのが、お母さんが選んでくれた結婚指輪なのだろう。確かに無駄な装飾はないし、ラインが綺麗で、私好みだ。
それと対になる婚約指輪なんて、どうやって選べば・・・・・
なんて思って眺めていたら、一粒石が大きい指輪で視線が止まる。
どう考えても、高いだろう。
だけど、ダイヤの横に寄り添うように、小さな淡い乳白色の石が3つ並んだ形がとても可愛くて。
「これですか？」
「え、あ、その！」
躊躇うより早く、左手をとられて、薬指にまず結婚指輪を嵌められた。そして、私が見ていた指輪をその指輪に重ねづけられる。
寄り添うように嵌められた指輪は、互いが互いを邪魔することなく、まるでそれで一つの指輪みたいに、ピタリと指に嵌まった。
「お似合いですよ」
「珠希さん、どうですか？」

店員さんにはほめられ、晴哉さんにはとろけるような笑みを向けられ、私は呼吸困難のふなみたいに口をパクパクするしかない。
確かに似合っている！
私好みだ。
だけど、値段！
値段を見てしまった。
給料三ヶ月分なんて逸話は、今は廃れているって私だって知っている。
だから、晴哉さんにしてみれば一ヶ月分位の値段だとは思う。思うが４０万近い金額の指輪を嵌めるなんて、一昨日まで無職家事手伝いの私にはハードルが高すぎるだろう！

そう思っていたのに、晴哉さんはなんてことないかのように、
「気に入っていただけたなら、これにしましょう。
サイズは結婚指輪と同じサイズで」
と店員さんに頼んでしまった。
「ちょ、ちょっと、晴哉さん！」
私がワタワタしながら晴哉さんを見ると、晴哉さんはニッコリと笑いながら言う。
「ダイヤの脇の石はムーンストーンらしいです。最近は婚約指輪にダイヤ以外の石がつくものもあるんですね」
呑気に世間話してる場合ですか。
「お、お金！」
「あ、指輪は結婚指輪もこちらも私が出します。それ位、私にさせてください」
「そういうことじゃなくて！」
「幸せにしますから」
「！！！」

今、ここで、言う！？

ここでっ！！

真っ赤になった私の前で、店員さんが微笑んでいる。

あー、もうここにはこない。というか、来るお金もないけど。

黙りこくった私を、了解したと勝手に解釈して、婚約指輪は決まってしまった。

因みに結婚指輪は、既に仕上がり済みだったらしい。

一ヶ月のリフォーム期間、父と母よ、娘の知らないところで色々と勝手にしないでほしい。

結婚指輪が、私好みな分だけ質が悪い。

「お義母さん、本当に珠希さんの好みを分かってるんですね」

指輪を嵌めたまま二人で店を出ると、晴哉さんにそう言われた。

「まあ、母親ですからねぇ」

そうぼやく私を、目を細めながら晴哉さんは見つめる。そして、しんみりとした声で、

「その指輪、大切にしてください」

と願うように囁かれた。

例え、成り行きとはいえ結婚は結婚だ。

きっと、前の結婚がうまくいかなかったから、今回は大切にしたいんだろうな、と思った。

それにしては、会って二回で結婚とか、どうかと思うけど！

キュッと右手を握られた。晴哉さんの左手にはキラリと光る、私と対の、ピカピカの結婚指輪。

うん・・・・・

成り行きではあるけれど、この指輪の輝きがくすんでも、大切にはしたいなぁと思った。

そこに恋とか、愛とかは、まだ全然なくても。

4　専業主婦

田中改め、西永　珠希。３０歳。

今日からピチピチの専業主婦です！

キラキラの結婚指輪が眩しいし、昨日からは同じ部屋で寝ました。

真ん中にカインが寝てたけどな！

いつもはそんなことないらしいんだけど、新しい家に落ち着かなかったらしい。

まあ、暫くはカインが真ん中でもいいんですけど！

別に昨日の夜はお気に入りの下着だったなんて、どうでもいいことなんですけど！

とりあえず、今朝も外見は変わらないが、中身だけはお気に入りの下着のまま、朝六時に起床した。

初めての愛妻弁当です、と。

著しく眠いけど、晴哉さんは離婚するまでは奥さんのお義母さん手製弁当だったらしく、そこは現妻としては、張り合いたいというか、専業主婦なんだし、それ位しかまだしてあげられることが分からないから、頑張りますよ。

まあ、メインが冷凍なのは許してほしい。

二度寝はしない質だけど、起きてすぐにテキパキは動けない。半分寝ぼけながら、冷凍食品を冷凍庫から取り出し、チンしていく。

弁当箱は、昨日買ってきたものだ。

ほうれん草のゴマあえだけは、手作りした。

と言っても、冷凍ほうれん草を解凍して作ったから、それが手作りだなんて、図々しいにも程があるかもしれないが、今はこれが私の精一杯。

母がいたときは、母に家事を任せきりだったから、思った以上にお弁当作りはハードだった。

七時に晴哉さんが起床。

「おはよう、珠希さん」

パジャマ姿の晴哉さんは、少し眠そうな顔で、何だか微笑ましい。

「おはよう、晴哉さん」

笑って返せば、晴哉さんは既に起きているカインの頭を撫でながら、椅子に腰掛ける。新しい我が家のキッチンはアイランドタイプという名前の対面キッチンだ。

流しのすぐ横にテーブルがあって、椅子が並べてあるから、用意がすぐにできるし、片付けも楽だ。

私は晴哉さんの前に、コーヒーと小さなパンを一つ置く。朝は食欲がないらしく、これだけらしい。

そしてカインのドッグフードも、カイン専用の食事場においてやると、カインは尻尾をバタバタ振りながら、ご飯を食べる。

犬を飼うのは始めてだけど、可愛いなぁ、と思う。

私、犬が苦手じゃなくてよかった。

ふふふ、と小さく笑ってから、私も自分の分のご飯を用意して、晴哉さんの対面に座る。

「いただきます」

「いただきます」
親といた時だって、そんなことしなかったのに、何となく二人声を揃えていた。お互いに目を合わせると、晴哉さんも少し照れくさかったのかはにかんでいた。

簡単な食事を済ませた後は、八時に晴哉さんは車で出勤していった。晴哉さんのお勤め先を聞いてみたら、この辺では大きな工場勤務だった。そこの品証課長だと聞いて、少なからず驚いた。３５で課長職ってかなりのエリートさんじゃないですか。
一応、２８までは会社勤めだったし、晴哉さんの会社は大きいので、私の勤めていた会社との取引もあった。だから、あの工場の課長職がどれだけ凄いかはわかる。

悔しいけれど、今のところ、晴哉さんに欠点らしい欠点は全くなくて、母親の審美眼の正しさに平伏するしかない。
もし、私が自分で結婚相手を探していたら、同じバツイチでも、風俗好きだとか、金遣いが荒い男としか結婚出来なかった自信がある。自信ていうか、見る目がないんだと思う。

第一、自分で選んでいたら、まず間違いなく、晴哉さんのような草食系のラマみたいな人、絶対選んでない。顔は悪くないけれど、申し訳ないが、私の好みでないからだ。

それでも3日一緒に暮らしても、嫌になったり、生理的嫌悪を抱かないのだから、今までの私、本当、何を基準に男を選んでいた？と自分で過去の自分に問い質したい。

「何だか、一緒にいて、楽なんだよなぁ」
ポツリと独り言を呟けば、「そうでしょ？」と言わんばかりに、カインが「ワンっ」と元気に吠えた。

洗濯を終えて、掃除をしたら、午前のカインの散歩だ。大体、1時間位してあげるといいらしい。晴哉さん曰く、カインは私が散歩をするようになってから、散歩回数が1日二回に増えて、とてもご機嫌らしい。

今までどうしていたのだろう、と思ったら、離婚してからはペットシッターなんてものを雇っていたそうだ。

私付きの家だったから、これからはペットシッターも不要だろうが、私の存在意義が、ことごとくペットに関わることばかりってのは、ちょっと切ない。

まあ、大した料理も作れないし、家事が凄い得意でもないから、これくらいで「いてもらって助かった」って思って貰えるなら、安いものだよなぁ、と思わなくもない。

久しぶりに外をがっつり散歩したら、うっすらと汗をかいていて、お昼の納豆ご飯が凄い美味しかった。

テレビを見ながら、納豆ご飯を食べていたら、ランチ特集なんてのをやっていて、晴哉さんが休みになったら、カインを連れてドッグランのついたレストランに行くのもいいな、なんて思ってしまう。

お昼を過ぎたら、洗濯物を取り込んで、夕飯の買い物に行く。カインの午後の散歩も兼ねたから、かなり時間がかかって、帰ってきたら4時を過ぎていた。

お風呂を洗って、スイッチ予約しておいて、夕飯の準備。

今日は頑張ってカレイの煮付けと、野菜炒め、ほうれん草の味噌汁だ。一汁一菜なんだけど、晴哉さんはこれで満足してくれるだろうか？と思いながら、くつくつ煮ていたら、電話が鳴った。

「はい、西永です」

慣れないなあ、と思いつつ、そう名乗ると、
『あ、珠希？』
と元気な声。
「あ、お母さん」
『どう、新婚生活は？』
「まだ3日目だし」
しかも、きちんと主婦業したのは今日が初めてだ。
『晴哉さん、いい人でしょ？』
得意気な母の声に、否定できないのが悔しい。
「まだどんな人か分からないし」
『でも、珠希のこと、大事にしてくれるでしょ？』
「う・・・・・・・」

珠希さん、って呼んでくれる晴哉さんの声に、たった3日で馴染んでいる自分がいるから、強く返せない。
珠希、って呼びつけでもいいのに、凄く丁寧にさん付けされている。しかもそれがよそよそしいわけじゃなくて、優しいから、困る。

惚れっぽいわけでもないのに、その優しさに絆されそうで。

『幸せになりなさいよ』
いきなり、母親がそんなことを言ってきた。
「はあ？　いきなり言われても・・・・・・」
『お母さん、神様なんて信じてなかったけど、今回だけは感謝した』
「まあ、宝くじ当たったもんね」
そのお金を娘に分けるどころか、家ごと売り飛ばすとは思いませんでしたが。
電話の向こうで母親がケラケラと笑っている。
ガヤガヤと何だかうるさいので外なのだろう。
「今、どこ？」

『羽田。これから飛行機乗ってお父さんと沖縄行ってくるから』
「はあ?！」
ちょ、父よ。会社はどうした?
『お土産はちんすこうね～』
言うだけ言って、ガチャリと電話が切れた。
私は電話を見つめながら、
「本当、何でもアリだな・・・」
と我が母のことながら、感心してしまう。
ふと、焦げ臭い匂い。

「ぎゃあ、煮付け?！」

私は叫びながら、カレイの煮付けに戻った。

その日、晴哉さんが帰ってきたのは8時過ぎだった。遅いときはもっと遅いらしく、今日は比較的早い方らしい。
「定時は、そんなにないかも。ごめんね」
着替えながら、晴哉さんにそう謝られた。
昨日より、敬語がなくなっているのは、慣れたからだろうか。
まあ、一緒に寝てる（カイン付き）し。
少しは親密にもなるよなぁ。
その砕け方が嫌じゃなくて、寧ろ嬉しく感じるのは、私、もうどっかしらこの人に惹かれてるんだろうなぁ、と自覚せざる得ない。
「ごめんなさい、カレイの煮付け、少し焦げて」
「そう?　美味しいよ」
二人で食べる食事は、思ったより楽しい。
「会社で扶養申請出したら、驚かれたよ」
「そりゃ、そうでしょうねぇ」

少なくとも二ヶ月前に離婚で、色々届けの変更もしたのだろうし、まさか舌の根が乾かない内に再婚だなんて、思いもしないだろう。
「カインと結婚したのかなんて言われた」
「ははは！」
確かにカインは女の子だし、晴哉さんの可愛がりようならそう思われることもあるだろう。

「今日はどうだった？」
「ん？　普通に家事してたら、あっという間に1日過ぎちゃった。専業主婦ってもっと楽なのかと思ったよ」
本当、時間の過ぎる早さに驚いた。
「そう。きっと慣れたら自分の時間も作れるよ」
「え、そうしたら私、昼寝しそう」
「はは、してもいいよ。夜、俺にお帰りって言ってくれるなら、何してもいいよ」

あ、初めて自分のこと、俺って言った。

そう思ったけれど、それ以上に言葉の内容に思わず胸が痛くなる。

この人、今までお帰りって言われてなかったのかな。

言われていたら、こんなこと言わないだろう。それに、嫁の親と同居していたら、挨拶位、交わさなかったのだろうか。

思ったことが顔に出ていたらしく、晴哉さんはやんわりと苦笑した。

「憧れてたんだ。奥さんがご飯作って、お帰りって言ってくれて、他愛ないこと食卓で話したりするの。

子供の時から、そんなことなかったから」

結婚してたのに？

「前の奥さんは、有能で仕事も出来る人だったから。彼女のしたいことに比べたら、俺の憧れなんて些細なものだし」

この人、凄く優しいんだ。

優しすぎて、自分のしたいことより、人のことを考えすぎてしまう。

何て損な性分だろう。

家族でご飯なんて、少しの自分のわがままで叶う夢なのに。

「そ、そんなこと言うと、今度、お父さんとお母さん、夕飯に呼んじゃうから！」

やばい。

声が涙ぐんだ。

必死に咳払いでごまかそうとしたけれど、出来てないのは、丸わかりだ。

晴哉さんは私をじっと見ながら、囁くように言う。

「俺、まさか、家を買おうとして、家族が出来るなんて思わなかったんだ。

珠希さんには、いきなりだったろうけど、お義父さん、お義母さんと話して、こんな家族思いの人たちと、自分も家族になれたら、って思って・・・・・・」

やめて、それ以上、言うな。
言わないで。

気づいたら、ご飯途中なのに、ボロボロと泣いていた。

そう、私のお父さんとお母さん、凄い素敵なの。仕事やめて定職つけない一人娘のことをなんだかんだいいながら、それでも労ってくれて。
私の家って、家族って、ありふれた当たり前の家だけど、私にとってはかけがえのない家族で。

そういう暖かさに惹かれたなんて、寂しそうに言う人の心の内なんて理解できないけれど、そういう暖かさに餓えていたのかって、思うだけで胸が苦しくなる。

私にとって当たり前に享受していたことを、今までずっと欲していた人が、今、目の前にいて、こんな焦げたカレイでも喜んで貰えたら、私の簡単な涙腺は直ぐに崩壊だ。

「珠希さん、俺と結婚してくれてありがとう」

晴哉さんが立ち上がり、テーブル脇を通って私の横にくると、ギュッと私を抱きしめて、そう言った。

ふと、夕方の母の電話を思い出す。
『幸せになりなさいよ』

それは私だけじゃなくて、きっと晴哉さんにも向けられた言葉な

んだと気づいた。

5　我慢

「で、何でいきなり苗字が変わったわけ？」

結婚して、1ヶ月たったころ、数少ない友人にメールを送った。

結婚しました、と。

そうしたら、近場に住んでいた親友から速攻で返信が来た。

そして、速攻でランチの予約を取り付けられて、今に至る。

「彼氏が出来たとも聞いてないんですけど？」

そう言った親友の有香はこの上なく不機嫌な顔だ。その横では彼女に瓜二つの2歳になったばかりの娘の睦月ちゃんが、「まんま、まんま」とはしゃいでいる。

食い意地は有香に似たんだな、と思いつつ、この二ヶ月のことを話すと、あっさり、

「さすがおかあさんだね」

と唸られた。

「初婚の根性悪選ぶなら、バツイチでも金持ってて性格いい男の方がいいわよねぇ。しかも、子無しだから養育費むしり取られる心配もないし」

「でも、恋愛とか全くない状態から始まったから、変かも・・・・・」

「いいんじゃないの？　お見合いして直ぐ結婚する人もいるんだし。変な性癖とかなけりゃ」

性癖と、きましたか。

有香はかわいい顔して明け透けだ。

ニヤニヤしながら、

「そっちの方も大丈夫なんでしょ？」

なんて聞いてくる。
私は飲んでいたコーヒーをむせながら、
「睦月ちゃんもいるのに！」
と窘めたが、
「あたしの娘よ」
と開き直られた。

睦月ちゃんの将来が著しく心配だ。

「まあ、なんとか・・・・・・・」
おおっぴらにいうのも恥ずかしくてそう言えば、有香は「じゃあ、いいんじゃない」なんて返した。
「あっちもこっちもバッチリなんて、本の中だけよ。現実なんて、我が家なんかここ二年、ご無沙汰よ！」

明け透け過ぎます、有香さん・・・・・・・

「まあ、二人目欲しいし、旦那に精力剤でも飲ませるか、寝込み襲うかしようとは思ってるけど」

ひぃ。怖い。
怖すぎる。

何だか聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、遠くをみていると、有香が聞いてくる。
「一緒にいて、我慢してることは？」
「は？」
「例えば犬飼ってるんでしょ？
犬だけで自分見てくれないとかないの？」

カインは可愛い。
散歩しているせいか、私も痩せてきたし、最近は犬のしつけ方も、晴哉さんに聞いて勉強している。

晴哉さんにとってカインは家族だし、私にとっても家族になりつつある。たまに一緒に寝るし。

晴哉さんに関して我慢することってあんまりない。
別に夜の生活とかそんなにがっついてないし。枯れてはないけど、そればっかりが人生じゃない気もするし。

苛つくこともあるけれど、一緒にいればそんなことは当たり前で。仲直りだって直ぐに出来る。

黙っている私を見ながら、有香はニヤニヤしている。
「流石、珠希のおかーさん。よくそんな好物件見つけてきたね」
「どういう意味？」
「我慢出来ない人は、最初から我慢できないことがあるの。それがないなら、大丈夫よ」
妙に自信のある言葉に、「そういうもの？」と問いかけてしまう。

結婚って、我慢だっていう人もいるじゃない？

有香はにっこり笑うと、
「出来る我慢と出来ない我慢があるのよ」
と言った。
「一月過ごして、直ぐに我慢できないことが思い浮かばないなら、相性いいのよ」
「そ、そうかなあ？」

「そうよ。ということで」
有香は鞄をごそごそ漁ると、
「結婚祝。今まで出してたぶん、きっちり回収しなさい」
とご祝儀までくれた。

夜、帰宅した晴哉さんと食後にソファーでまったり寛いでいた際、有香の話と、貰ったご祝儀のことを言った。
晴哉さんは
「それじゃ、今週末はお返しを買いに行こうか」
と、提案してくれた。
「半返しだろうから、このご祝儀から出すよ」
「そのお金は珠希さんのお小遣いとして、何か買いたい時に使って。お返し代は家計から出そう」
「でも・・・・・・」
「一緒に選ばせて」
穏やかな笑顔で晴哉さんは意外に強引だ。
と言っても、それは私が困ることで強引なことは一つもなくて、むしろめたくたに甘やかされているのが分かる強引だ。

「晴哉さん、私に甘すぎ！
晴哉さんの知らないところで、私、無駄遣いしてるかもよ？」
「珠希さんはしないよ。家計1ヶ月も預けていれば分かる」
断言されたら、何も返す言葉はありません。

家計預かっていると言っても、入ってくるお金が予想以上に多いのだ。今まで親からお小遣いを恵んで貰っていた身としては、ありすぎるお金にビクビクしながら、買い物したりした。
食費はいくらぐらいがいいのかとか、お母さんにこっそり電話し

たのは内緒だ。

「で、でも、保険とか入らせて貰ってるし」

そうなのだ。

齢３０にして初めて医療保険にも加入した。

勿論、晴哉さんの口座から自動引き落としだ。晴哉さんの主契約に便乗した形だけど、帝王切開なんかも出るらしいので、と言われて加入した。

というか、子供出きること前提なのが、びっくりだ。

まあ、出来る覚えはあるけれど、前の奥さんとは出来なかったんだし、私とも出来ないとは考えないのだろうか？

むにゃむにゃ考えていたら、

「何、どうしたの？」

と聞かれてしまった。

流石に、今回の結婚でも子供出来ないとは思わないのかなんて、聞けるわけがないので、

「晴哉さん、何か我慢していることあります？」

と、昼間の有香との話を話題に出す。

「我慢？」

「私のいびきがうるさいとか、トイレが臭いとか、何でも」

晴哉さんはうーんと唸ってから、ふと気づいたように目を見開いた。

「一つ、あるかな」

「ええっ！？」

自分で聞いておいてなんだが、凄く意外だった。

何て言うか、日々泰然としていたから、我慢とかしている風には

見えなかったのだが、どうやら晴哉さんに我慢を強いていたらしい。
今更ながらにドキドキする。

どうかそれが出来る我慢でありますように、と願うくらいには、二人の生活は居心地が良くなっていた。

だって、波長が合うのだ。
テレビを見てて、笑う場面、怒る場面、思いついて話しかける場面、それで話が食い違ったことはない。
最初は私に合わせてくれているのかと思ったが、そんなわけではなく、考え方とか、話すタイミングが似ているのだろう。

男の人と付き合うとき、そんなこと気にしたことがなかったから、実際晴哉さんと結婚してみて、そう言った目に見えない部分の相性の大切さってのを、身を持って実感していた。

「な、何、我慢しているの？」
恐る恐る顔をあげて、晴哉さんに問いかけると、晴哉さんは晴哉さん独特の、やんわりした微笑を浮かべてから、ちゅ、と私にキスしてきた。

「！！」
そういうことはベッドの中でだけだったから、かなり動揺してアワアワしてたら、晴哉さんに抱きしめられて、ぼやかれる。

「俺って、性欲そんなにないと思ってたし、多分これから衰える一方だと思うんだ」

い、いきなり何の話？！

「だけど、付き合い始めだからかな？
珠希さんと無性にイチャイチャしたくなるんです」
「い、イチャイチャ、ですか」
「うん。だけど、こういうのって落ち着いてくると減ると思うから、今、ガツガツするのって、後で減ったときに何か思われちゃうかな、とか考えて、我慢してる」

そ、そういう我慢ですか。

思いも寄らないものだった。
草食系だと思いこんでいたから、そっちは回数少ないことが当たり前だと思っていたのだけど、そんなこともないんですね。

そういや、付き合い始めって、結構猿みたいにガツガツするよな、なんて実体験で思い出す。

「が、我慢しなくていいよ？」
上目遣いで晴哉さんを見上げれば、晴哉さんは困った困ったとぼやく。
「俺、そんなに若くないのになぁ」
なんて言われた次の瞬間、膝裏に腕を差し込まれて、よっ、とお姫様だっこされた。

「う、うひゃあ！！」
まさか、この歳でお姫様だっこ！
最近、カインの散歩で少しは痩せたけど、それでもお世辞にも軽い方じゃない。
案の定、晴哉さん、少しよろめいた。
「お、お、降ろして！」

「ん？　頑張らせて」

にっこり微笑まれて、そのまま寝室に連れてかれる。階段とかひいって声上げるほど怖かった。

・・・・・

・・・・・・・・・・・・

結論。

結構、色々我慢させていたみたいだけど、私と晴哉さんはもっと仲良くなった。

6　私の息子

「新婚生活はどうなの？」
お茶を啜りながら、母がそんなことを聞いてくる。
今日は平日。
お父さんは仕事だから、お母さんも暇なのだろう。わざわざ古巣である我が家に遊びに来た。
暫く見ない内に、随分化粧が濃くなった気がする。
それを指摘すると、「お金遣いまくってるのよ♪」なんてはしゃがれた。

まあね．．．お母さんの当てたお金だから何も言いませんけどね。

「あんまり無駄遣いしないほうがいいんじゃないの？」
とやんわり窘めたら、
「墓までお金は持ってけないんだから、あるだけ遣うわよ」
とはっきり宣言された。

そこまで言われたら、これ以上追及出来ない。第一、私のお金じゃないし。

「うまくいってるみたいね」
母が嬉しそうに目を細める。
「悔しいけれど、うまくいってる」
私も正直に自分の気持ちを告げた。
「恋愛したわけじゃないけれど、晴哉さんといると、お父さんお母さんと住んでるときと変わらないんだ」
血のつながらない他人なのに、それがとても不思議だった。
たまに戸惑うこともあるが、慣れてしまえばそれが晴哉さんなん

だと思えてしまう。

「ただいま」と言われて、「おかえり」と返す。

「おはよう」から始まって、「おやすみ」で終わる。

当たり前のことを、当たり前に繰り返せる。

それがとても居心地がいい。

「お母さんも、晴哉くんを見て、ピンときたの。あぁ、この人が珠希の旦那さんになったらいいのにって」

「は？　何それ？」

娘の結婚相手を直感で選ばないでほしい。

「話してみて、晴哉くんがどんな人か知ったら、もうこれは、絶対逃せないと思って！」

「だから家付きで娘を差し出した、と？」

「だってウカウカしてたら、あんないい男、他の誰かにすぐかっさらわれるじゃない？」

母の言葉を否定できない。

犬を溺愛し、バツイチではあるけれど、それを補えるほどの愛情深い優しい人だ。

何故、初めての結婚が寂しいものだったのか、信じられないくらいだが、それでも晴哉さんは寂しかったのだ。

私の両親と何度かこの家で夕飯を食べた。その時の晴哉さんは、こちらが驚くくらい楽しそうで、和気藹々と父と酒を酌み交わしていた。

「こういう風にお義父さんと晩酌してみたかったんです」

そんな風に告げる言葉に嘘はなく。

何でこんなに情深い人が、そんなことさえ満足に経験出来なかったのか、不思議で仕方なかった。

「恋愛は本人同士だけど、結婚は親もどうしたって入ってくるからね。それでうまくいかないことなんてザラよ」

「う、お母さんがそう言うと生々しい」

既に両方の祖父母を見送った両親にも、何かしら親との歴史があったのだろう。

私にとっては優しいお祖父ちゃんお祖母ちゃんだったけど、それだけではないこともあったのかもしれない。

母はくすくすと笑うだけだった。

ふと、今までテーブルそばでうつらうつらしていたカインがいきなり起き上がり、玄関に向かって走っていく。

「カイン？」

カインが唸る。そして直ぐにそれは警戒を含んだ鳴き声に変わる。

珍しい。来客があっても吠えないのに。

その声と同じタイミングでチャイムが鳴る。

インターホン越しに「はい」と返事をすると、モニターに両親と似たような世代の夫婦が立っていた。

『上條と言います。晴哉のことで来ました』

無愛想な声でそれだけ言われる。

晴哉さんのこと？

母と顔を見合わせて首を傾げながら、玄関に向かい、ドアをあけると、老夫婦が厳しい顔で立っていた。

老紳士の方が私に言う。

「あんたが晴哉の新しいかみさんか？」

「はぁ・・・」

晴哉さんの親戚だろうか？

でもそんな話を聞いたこともなく、戸惑いながら頷くと、老紳士はジロジロ私を見てから言う。

「晴哉は上條家の婿だ。

別れて返しなさい」

「は？」

一瞬、何を言われたか分からなかった。

呆然としていると、老紳士はイライラしながら私に言い募る。

「まさか離婚して3ヶ月で再婚してるとは。

あんた、晴哉と不倫してたんだろう？

こっちは、弁護士雇って、訴えてもいいんだ。

図々しくも人の家の婿を泥棒したことに、目をつぶってやるんだから、早く別れなさい」

何、このボケ老人？

一生懸命頭を働かせて、婿という言葉から可能性を確認してみる。

「前の奥さんのご両親ですか？」

「娘が勝手に離婚なんぞしおったが、あれは間違いだ。晴哉ほど、見た目も学歴も年収も申し分ない男はなかなかおらんというのに！」

いやいや、原因はあなたたちの娘さんでしょう。

「あなたも不倫だったならおあいこでしょう？
なかったことにしてくださいな」

今まで黙っていた細君まで、老紳士と似たようなことを言ってくる。

おあいこって、何言ってるの、この人たち。

晴哉さんの、元義父母だと分かっていても、胸にこみ上げてくるムカムカに堪えられなくなってくる。

なんだこれ？

なんだこいつら？

「私たち、不倫してませんから。
それに、娘さん、お腹に別の男性のお子さんがいらっしゃるんですよね？」

声が上擦らないように精一杯がんばってそう言えば、老紳士は一笑する。

「あんな学歴もない若造、上條の婿に相応しくない」

うわ、どれだけの家ですか。

上條なんて知らないんですけど、どれだけ凄いんですか？

それにさっきから、学歴やら年収やらって、晴哉さんのいいところ、一つも出てこない。

なにこれ？

これ、本当に家族だったの？

「わざわざこうして出向いてやったんだ。
この離婚届に早く記入しなさい」

そう言われ、玄関口で離婚届を突きつけられた瞬間、その離婚届をすっ、と奪う手が見えた。

白い、もう若くないその手は私の背後から伸びて、そしてビリビリとそれを破く。

白い手から、薄っぺらい紙片が舞い落ちる。

「人の家にずかずか上がりこんで、礼儀知らずが偉そうに」

それは今まで聞いたことのない母の声だった。

「なんだ、あんたは？」
老紳士が訝しげに母を睨むが、母の視線の方が強い。まるで汚れたものでもみるみたいに、彼らを見つめると言い放つ。

「晴哉は離婚しません。
もう二度と、上條さんの婿にもならないでしょう」
「っな！　なんだ貴様！」
「貴様なんて汚い言葉を平気で使う方の家柄のどこに、晴哉が相応しいんでしょうか？
今後一切、この家にも、晴哉にも近づかないでください」

母の声は一切の震えもなく、怒りもなく、ただ、淡々と老夫婦たちを威圧していた。
その迫力がどこから来るのか、娘の私にさえ分からない。

「晴哉晴哉と！　晴哉は上條の・・・・・・！」
「晴哉はここにいる珠希の夫です。
そして今は私の息子でもあるんです。
帰りなさい。
これ以上、生き恥を晒したくなければ」

すっ、と指が玄関の向こう側を指す。

完全に老夫婦は飲まれた。母の言葉に。

だけど直ぐに老紳士はムキになって、何かを叫ぼうとした瞬間、携帯の着信音が鳴り響く。
私や母のではない。
細君の方だった。

上條の細君はその音に一瞬、戸惑うが、電話を取るように促したのは老紳士ではなかった。

「あなたの娘さんからですよ」
母が冷たい声で言った。

何で分かるの？！と思った。細君もそう思ったらしいが鞄から取り出して相手を確認して、やはり娘だと分かったらしい。

「ハナエ、どうしたの？」

電話が離れているのに、『なんてことしてるの！！』という、女の声がした。
『晴哉から連絡がきた』『離婚したのに！』
『これ以上、晴哉の新しい家にいったら、訴えるって！』
それらの言葉が立て続けに漏れ聞こえる。
細君が「でも」とか、「ハナエ」と呼び掛けても、相手は激怒するばかりだ。
逆鱗に触れたのだろう。

その電話の声を聞きながら、良かった、少しは元妻はマシな人で。なんて、不謹慎にも思ってしまった。

電話はまだ終わらなくて、母は顔が青ざめていく老夫婦を見下ろしながら、
「出て行きなさい」
ともう一度、言った。

老夫婦は、まだ何か言いたげだったが、そのまま、出て行く。
私は唖然としながら、母を見た。

母はにこりとして、自分の携帯を取り出す。

「さっき、名前名乗った時にピンときたから、晴哉くんに電話したのよ」
「あ、じゃあ、晴哉さんから元奥さんに？」
「たっぷり脅したんじゃないの？
あの親、やけに年収やらって、うるさかったから、きっとドケチよ」
母の言葉に思わず吹き出してしまう。

確かにがめつそうだった。

「珠希、離婚してすぐだろうが、何だろうが、あんたが正妻。晴哉くんの唯一の奥さんなんだから、堂々としてなさい」

「う・・・・うん」

バシン、と痛いくらい強く背中を叩かれて、少しむせた。

夜、晴哉さんは帰宅するなり、私を抱きしめた。その行動にかなり驚いてしまう。

「お、おかえりなさい」

「ただいま。今日はごめん。怖かったろう？」

「いや、お母さん、いたし」

いなかったら、ちょっと怖かったかもしれない。

だっていきなり離婚届だして、離婚しろって、頭おかしいんじゃないか、と思った。

それを晴哉さんに告げると、「あの人たちは自分のことを第一に考えるから」と苦々しい顔で言われた。

「で、でも以前はお義父さん、お義母さんだったんだよね？」

そう問えば、晴哉さんは何とも言えない顔になる。

晴哉さんの学歴や年収ばかり言っていた人たち。

晴哉さんは、きっと元奥さんが好きだったから、結婚したし、婿入りもしたのだろう。

でも、この人は人一倍、寂しがりで、人一倍、家族という形を欲していた。

そんな人があの人たちと作った家族って、どんなだったのか、考えるのもしんどかった。

人生って、うまくいかないな。

欲しいものは、ごくごくありふれたもののはずだったのに。

好きだけじゃ、幸せになれないなんて。

「お母さん、晴哉さんのこと、婿じゃなくて、息子って言ってたよ」

そう言うと、晴哉さんはくしゃりと顔を歪めて、更に強く私を抱きしめた。

そして肩口に顔を押しつけながら、

「ごめん、弱音吐かせて」

と呟いた。

そんな晴哉さんは始めてで、そして同時に強く愛しさがこみあげる。

「どうして、どうして・・・。

あんな奴らばかり元気に生きてるんだ?」

それは最大級の、呪いにも似た言葉で、確かに誰かに聞かせられるようなものじゃなかった。

それでも、そこまで、だったのか。

と、その言葉に至るまでの過程に胸が締め付けられそうになる。

きっと、幾度も人ではない扱いも受けたのだろう。

子供の産まれないプレッシャーも、沢山感じたのかもしれない。

愛しあって結婚した筈の二人が、歪んでしまうまで、どうしよう

もなくなるまで、どんな沢山の心無い言葉が、彼を傷つけたんだろう。

幾つになったって、
心無い言葉には、傷つくのに。

「私がいるよ」
気がついたら、ギュッと晴哉さんを抱きしめていた。
やっぱり目からは涙がポロポロこぼれていた。涙腺、弱すぎだ、私。
泣きながら、震える声で、晴哉さんに伝える。
「私たち家族が、いっぱい晴哉さんのこと、愛してあげるよ」

恋愛して結婚は出来なかったけど、家族として愛してあげるから、

だから、

一緒に幸せになろう？

7　結婚式

とてもよく晴れた日、今日は布団を干して、晴哉さんがお休みだから午後から買い物にでも行こうなんて思ってたら、朝一で両親に拉致られた。

何事？！

なんていう暇もなく、つれてかれたのは大きなホテル。

「いらっしゃいませ」

と頭を下げられ、両親に「綺麗にして貰いなさいよ」と言われて、何がどうしてこうなったのか？？

気がついたらウェディングドレス姿で、ホテルに備え付けのチャペルの扉前に立っていた。

「何ですか、これは？」

隣に立つ父に問えば、モーニング姿の父親は、私を眩しそうに見ながら、

「よく似合う」

と涙ぐんでいうし。

「いやいや、そういう問題じゃないし！」

もう、家事売られた時点で、大抵のことには動じないけれど、サプライズ過ぎるでしょ、これは！！

「そのドレス、お母さんが選んだんだ」

母よ、また貴女ですか・・・・・・・

娘の人生、尽く楽しんでますね。貴女。

後で絶対、文句言ってやる！と思っていたのに、扉が開いて、バージンロードの先に晴哉さんの姿を見つけたら、真っ白になってしまった。

頭の中、このドレスみたいに真っ白。

パイプオルガンの荘厳な音と共に、父に伴われてバージンロードを歩いていく。

結婚が先になって、こういうこと、出来ないだろうなと思ってた。

何もかも、母のお膳立てというのが気に入らないけど、それでも、もうしないだろうな、と思ってたことをされて、涙もろい私は、それだけでちょっとうるりとしてしまう。

晴哉さんの元までたどり着いて、「知ってたの？」と、視線だけで問えば、晴哉さんは申し訳無さそうに小さく頭を下げた。

あぁ、お母さんがまた強引に進めたんだろうなぁ。

当事者の母は、一番前の席で、既にハンカチで目尻を抑えながら、私を見ている。

そうだよね、娘の結婚式、夢見てたのはお母さんだもんね。

私が小さい頃から、「珠希は結婚式にはどんなドレス着たい？」なんて聞いてきてた。二十歳（はたち）過ぎたら、恋人ができる度に、「ドレスはお母さんも一緒に選ぶからね！」と娘より夢見がちだったっけ。

一緒に選ぶなんていいながら、勝手に旦那も指輪もドレスも選んでくれちゃって・・・・・・。
文句の一つも言いたいところだけど、晴哉さんのとろけるような笑顔を見たら、何も言えなくなってしまう。

「よく似合ってる」

晴哉さんが私にスッと手を差し出す。
スルリと父の腕から手を外し、彼の手に重ねると、すんなりと壇上にエスコートされる。
目の前には外国の方と思われる牧師さん。

「それではこれから、西永　晴哉さんと田中　珠希さんの結婚式を始めます」

うわ！　日本語ペラペラだ！
牧師さんは流暢な日本語で、話していく。

式自体は、友達の式に参列した経験も、この歳になれば結構多かったので、それらと変わらない感じで行われた。

賛美歌歌って、
牧師さんが何か言って、
誓いの言葉を誓い合って、
キスして！（親の前でって！！）
宣誓書に名前書きあって、
また賛美歌歌って、
また牧師さんが何か言って、
退場して終わり。

おでこにチューでも良かったのに、きちんと口にチューされた。しかも、プロのカメラマンがいるらしく、シャッター音が聞こえてた。

やーめーて！

そんなところ、撮らないでー！！！

絶好のシャッターチャンスなんだろうが、キスシーン撮られるって、恥ずかしいでしょうが！！！

そう思ったけれど、ジタバタするわけにもいかず、表面上は大人しく、内面嵐で、式は終わった。

ううう、結婚式ってこういうものなのか。

もっと感動できるのかと思ったけれど、サプライズ過ぎて、そういう感動の針は振り切ってしまった。

「はい、それではチャペル前で記念写真を撮ります！」

両親がカメラマンの声にウキウキしながら、私たちの隣に並ぶ。晴哉さんの横に父。私の横に母。

「珠希、綺麗だった！」

涙ぐんでいる母親に、私は

「やるんなら、一言言ってよ」

と文句を言った。

「だって、珠希に言ったら、ここがいい、あれがいいって、決まらなかったじゃない」

「いやいや、こういうことは私にも選ばせてよ！　一生に一度のことなのに！」

「あら、晴哉くんは二度めよ？」

母のその言葉に、晴哉さんがギョッとする。私もびっくりだ。

結婚式に言うことか、それ？！

「でも、二人ともこれっきりよ。
これが、最初で最後。
そして、これからは全部、二人で決めて、二人で頑張っていかなくちゃならないの。
お母さんがお膳立てできるのも、ここまで」
お膳立て過ぎるにも程がある。
「そんなこと言って、これからも色々やってくるんじゃないの？」
少しふてくされてそう言えば、母は笑いながら、「しないわよ」と断言する。

「これからは、夫婦二人で、がんばりなさい」

ここまであれこれ口出したくせに、その放置感、半端ない。

「娘の人生の重要事項にこれだけ口出して、全部お膳立てしたくせに・・・・・・」

私はぼやきながらも、急に放り出された気分で少し不安になる。
う、これがマリッジブルー？
いやいや、もう結婚してるし。
結婚式、終わったし。

「はい、こちら向いてください！」
カメラマンさんの声に、そちらに目がいく。
後で絶対、文句言ってやる！

「珠希」
「何よ？」
前を見ながら、引きつる笑顔を浮かべる私に、母も前を見ながら、少し小さな声で言う。

「宝くじ、実は当たってなかったの」

・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ？！」

思わず母の方を見た瞬間、パシャリとシャッター音とフラッシュ。
自分だけ前を見てる母。ずるい！！

「花嫁さん、こっち向いて！」

カメラマンさんに怒られてしまったじゃないか！！！

その後は着替えたら、今日はこのホテルに宿泊だと晴哉さんに教えられた。両親から強引に式をしたお詫びらしい。
いや、それより宝くじ当たってなかったら、どうやって家のリフォーム代金だしたんだとか、この式やホテルの代金はとか、色々聞きたかったのに、着替えている内にドロンと消えていた。
逃げ足、早過ぎ。

しかも、着替えたら着替えたで、エステ付きのセットだなんて言われて、昼の軽食の後にこってり、つるり、ふへぇ～、とエステ体験をしていたら、宝くじなんてどうでもいっかぁ・・・なんて、

思うわけあるか！！！

ディナーの前に、部屋で寛いでいる晴哉さんに、私は腰に手を当てながら問いかける。
「晴哉さんは知ってたんですか、宝くじじゃなかったって！」
「そのワンピース、とても似合うね」
晴哉さんはソファから立ち上がると、私を優しく抱き締める。
「お義母さんが見立ててくれたんだよ」

また母か。

あれも、これも、それも、どれも、
全部、全部、母親。

あまりにも、敷かれすぎたレールに怒りを通り越して恐怖さえ覚えそうになる。

「お義母さん、本当に珠希さんが大事なんだね」
嬉しそうに微笑む晴哉さんに、私は彼の胸を押した。抗議の意味を込めて。
「だからって、何でこんなに強引に！！」

晴哉さんは微笑む。
この3ヶ月、見慣れた優しい笑顔。

「俺は、珠希さんに会えて良かったよ。
結婚も出来て良かった。
お義母さんは、確かに強引だったけど」

「・・・・・・」

「俺は君のお義母さん程、家族想いの人を知らない」

晴哉さん？

何だか、晴哉さんの顔が笑っているのに、泣きそうに思えた。

きっと、晴哉さんにはお母さんとの思い出が少ないから、私の母のお節介も羨ましく思えたのかもしれない。

「お母さんが私のこと心配してたのは分かってる！」

職が定まらなかった私。

独りで生きていく自信もなく、好きになる人は尽く『ハズレ』ばかりで、ただ、少しずつ過ぎていく毎日が怖くなりはじめていたことを見て見ぬふりをしていた。

未来なんてものがあるなんて、想像も出来なくて。

「でも、だからって、嘘をついてまで私に結婚までさせたことの意味って何？」

晴哉さんと会えたことも、結婚したことも、少ししか時間を共にしていないけど、感謝している。

だけど、何もかも強引すぎる。

それが、怖い。

私の意志とか、私の人生とか、そういうレベルの問題じゃなくて.

・・・・・・

「あぁ、珠希さん、君はもう分かってるんだね？」

私は押しのけようとしていた晴哉さんの胸を強く掴む。爪を立てるように。

そして、必死に首を横に振る。

知らない。

気づいてない。

分からない。

買ったにしては賃貸みたいな中古マンションだった理由。

リフォームの意味。

母の化粧が濃くなった理由。

指輪、結婚式、ワンピース。そして晴哉さん。

強引に、だけど、一生懸命、私のために向けられた全てのことの意味。

幸せになりなさい、とお母さんは言った。

ねえ、お母さん。

私はお母さんを幸せにしてあげられた？

8　最愛の娘

珠希へ

この手紙は、今から珠希に晴哉くんとの結婚を告げる前に書いています。

これから先、珠希が幸せになれたら、その時、お父さんから珠希に渡して貰おうと思って書いてます。

お母さん、手紙なんて書き慣れてないから上手く書けないんだけど、話し言葉でいいよね？

ええと、お母さん、あと少しで、死にます。

病気です。

半年前、病院に行って、先生に言われました。言われた日はショックで、何も考えられなくて、ぼんやり公園のベンチに座りこんでいました。

西永晴哉くんとは、その公園で知り合いになりました。

お母さんの方が死ぬのに、晴哉くんの方が死にそうな顔で、側にいたカインがクゥンと鳴いていて可哀想だったので、お母さんからナンパしちゃいました。

晴哉くんは最初は戸惑っていましたが、何回か病院の帰り道の公園で会う内に、お互いのことを話すようになりました。

書いておきますが、お母さんはお父さん一筋です。

晴哉くんはとても素敵な男性なのに、奥さんが浮気していて、家

族にも恵まれず、とても寂しそうでした。
お母さんは晴哉くんと話す内に、こんな子が息子だったらいいのにな、と思いました。
その内、晴哉くんの奥さんに子供が出来て、晴哉くんが離婚することになり、お母さんが元気で動ける時間も少なくなってきました。
このまま、家にいたら、きっと珠希にもお母さんの病気が分かってしまう。
そう思ったとき、お母さんは珠希のこれからが心配になりました。
職もなく、生きていく生き甲斐もなく、ただ、毎日を過ごす。
お母さんがいる内はいいでしょう。
でも、お父さんと二人きりになり、やがてひとりになったとき、珠希が泣きそうで辛いのです。
あなたがひとりでも生きていける強い子だったら、良かったのに。
だけど、珠希は、情に厚く、涙もろく、優しくて、そして寂しがりやの女の子に育ちました。
お母さんにとっては自慢の娘です。
そんな珠希がひとりにならないためにはどうすれば良いのか、お母さんは考えました。
そして、皆を巻き込みました。
晴哉くんは家族に餓えていました。
優しい彼は珠希の好きなタイプではないかもしれませんが、珠希

と話は合うでしょうし、穏やかな愛情を育める人だと、お母さんは思いました。

だから、晴哉くんを説得し、お父さんに精一杯お願いして、

お母さんは珠希に、

『ひとりにならない人生』

をプレゼントします。

巻き込んだ晴哉くん、お父さん、ごめんなさい。そして、ありがとう。

だけど、珠希が幸せな人生は、きっと、お父さんも、晴哉くんも幸せな人生だと、お母さんは確信しています。

暖かな新しい家庭が、きっと、お母さんのいない寂しさを埋めてくれるでしょう。

だから、お母さんからあげられる物をいっぱい、いっぱい、いっぱい、死ぬまでに用意してあげます。

珠希の意見がちっとも反映出来なくてごめんね。

でも、ここまでだから。

これからは、どんなにしてあげたくても、何も出来ないから、お母さんは最後に自分のわがままを通します。

わがままなお母さんでごめんね。
お母さんの娘に、生まれてくれてありがとう。

幸せになってね、珠希。

宝くじじゃないけれど、お母さんは自分の人生の最後に、晴哉くんという『当たり』を引けた幸運に感謝しています。

だから、きっと、珠希は幸せになれます。

母より。

☆☆☆

「わがままますぎ・・・・・・」

我が家の一階にリフォーム後に出来た和室は、父の部屋になった。
買ったと言いながら、実は賃貸だったマンションから、父は我が家に戻ってきた。
真新しい仏壇と一緒に。

父の部屋のワンスペースに、ちょこりと置かれた真新しい仏壇の

前で、私は可愛らしいピンク色の封筒に入った手紙を、父から渡された。

母が倒れたのは、私の結婚式のすぐ後。
そして、一ヶ月後にはぽっくりと死んでしまった。

私が結婚して、五ヶ月目に入ったときのことだ。

「ねえ、晴哉さん・・・・・・」
私は涙声で晴哉さんに問いかける。

「お母さんのこんなわがままで、私と結婚しちゃって良かったの？」

晴哉さんは笑う。泣きそうな笑顔で。

「そんなお義母さんとお義父さん込みで、珠希さんと結婚したかったから、したんだ。
涙もろくて寂しがり屋の奥さんに、
娘想いのお義母さん、
そんな二人を黙って受け止めてくれるお義父さん、
そんなみんなと、家族になりたいと思ったんだ」

きっと、私と晴哉さんが普通に出会っても、結婚はしなかっただろう。
お父さんとお母さんがいたから、晴哉さんは私と結婚した。

そして、多分私もお母さんに言われなければ、こんなに優しい旦那さんを持つこともなかった。

私は手紙を握りしめたまま、晴哉さんの胸にこつんと頭を寄せる。
きっと、お父さんの前じゃ、私は泣けなかった。

だって、お父さんだって、辛い。

お母さんが死んで辛いのは、お父さんだって一緒だ。

「ふっ・・・・・・ぅぅ・・・・・・・・・・・・」
嗚咽が漏れる。そんな私を晴哉さんが抱き締めてくれる。
泣いていいよ、と背中をさすってくれる。

私はその胸に顔を押しつけて、子供みたいに泣いた。お葬式でも
泣けなかったのに、バカみたいに泣いた。

お母さん、

お母さん、

お母さん、

お母さん・・・・・・・・・・・・!!!

泣き虫でごめんなさい。
強い娘になれなくて、ごめんなさい。
寂しがり屋でごめんなさい。

お母さん、

私を愛してくれて、ありがとう。

私、幸せだよ、お母さんの娘に生まれて。

お母さん、

お母さん・・・・・・・・・

・・・・・・お母さん。大好きだよ。

エピローグ　中古住宅※嫁、舅、仏壇付

「ただいま」
そう声をかけなくなったのはいつからだろうか。
冷え冷えと冷え切った家の中には、３人の人間が既にいるはずなのに、深夜一時という時間帯のせいもあって、誰も起きていない。
「上條、最近、ワーカーホリックじゃないか？」
同僚にも心配されたが、この冷め切った家に帰るのはどうしても、怖くて、寂しくて、晴哉は日に日に帰宅時間が遅くなった。
土曜日も出勤か、朝から飼い犬のカインと散歩に出掛けた。
新婚直後から、妻の実家に入り婿して早７年。
いっそのこと、舅たちと居住を別にした二世帯住宅にリフォームしないかと妻に提案したが、妻は「どうして？」と小首を傾げるだけだった。

「晴哉、お前に原因があるんじゃないのか？」
４年ほど前から、舅たちに子供が出来ないことを暗に非難された。

「英恵は、婦人科でも異常がないといわれたみたいなのに」
晴哉とて自分の方に原因があるのかと、恥をかなぐり捨てて病院に検査をうけにいった。異常はなかったと妻から姑たちに話はいったはずなのに、舅たちは晴哉ばかりを責める。

「仕事のし過ぎなんじゃないか？」
「先祖の供養が足りないのでは？」
「お前が」
「晴哉が」

いつしか、あれほど望んで手に入れた家族が

、家族ではなくなり、
「私、妊娠したの」
全く覚えのない妻の妊娠に、もう限界だと告げていた。

「晴哉くん、うちの息子になる？」

昼間の公園、土曜日の昼に晴哉は顔馴染みの婦人と話し込んでいた。
半年ほど前から知り合った彼女は、自分は末期のガン患者だと、笑いながら言っていたが、晴哉には全くそう思えなかった。
それでも季節の変わり目に、徐々に婦人の線が細くなるのを見るに付け、世の中は何て不公平なんだと思った。

もっと、死んでほしい奴なんて沢山いるのに。

そんな晴哉の心の中の毒を見抜いたかのように、婦人は穏やかに笑いながら、晴哉に言った。

「犬が住める家に引っ越さないと駄目なんでしょ？」
妻の家から逃げるように出て、今は仮住まい暮らしだ。幸い、二世帯住宅なんてものにしなかったから、預金もあった。
いっそのこと、カインと二人だけで暮らせる中古住宅なんかでも買おうかな、とぼやいたら、婦人が笑いながら言ったのだ。
「中古住宅、嫁付きでどう？」

婦人には３０歳になる娘がいるという。

がん保険で入ったお金と預貯金で、家をリフォームするから、家ごと娘を貰ってくれという婦人に、晴哉は苦笑しながら、
「勘弁してください」
と頭を下げた。

婦人の言葉を冗談だと思ったからだ。

でも、婦人は冗談なんて一つも口にしていなかった。

「晴哉くんがほしくてほしくてたまらなかったもの、私たちなら晴哉くんにあげられるよ？
だから、我が家の子になりなさい」

３５の男に子供も何もないだろうと思ったが、それでも婦人の言葉に、惹かれなかったと言えば嘘になる。

そして極めつけの一言。

「自分の家族を幸せにしてから死なないと、死んでも死にきれない。その家族に晴哉くんも加えてあげるから、我が家においで」

婦人に興味があった。

赤の他人の自分にも優しく暖かいこの人が、その人生の最後に幸せを願う程の娘は、どんな人なのだろうかとも思った。

「そういう問題じゃないでしょう！
仮にも夫婦になったなら、不倫なんてする前にきちんと決着つけるべきだったでしょうよ！

子供できたから離婚って、馬鹿にするにも程がある！！」

婦人の娘、珠希は真っ直ぐで、人のことにも直ぐ怒り、そして泣く、素直な人だった。

（あぁ、俺は幸せになれるんだろうか？）

小さい頃から、ただ、ずっと、

家族が欲しかった。

それはどんなに暖かくて、どんなに優しいものなんだろう、と夢にまで見た。

ほしくて、ほしくて、

本当にほしくて。

「晴哉くん、珠希と結婚して良かったでしょう？」

珠希と結婚式をあげた日、先に着替え終わった晴哉に、そう義母になった婦人が言う。

「はい、ありがとうございます。お義母さん」

深々と頭を下げれば、義母は嬉しそうに微笑んだ。

その笑顔が、出会った頃よりずっと線が細くなったことを、晴哉

は胸が引き裂かれそうな思いで見ていた。

「ただいま」
カインの散歩を終えて我が家に帰る。
以前だったら言わなかったその言葉に、今は返事がある。

「おう、お帰り」
舅にあたる義父が、自分の部屋から顔を出し、頼んでもないのにカインの足をふく布を持ってくる。
「ありがとうございます、お義父さん」
「ん」
無口な義父だが、その表情は義母とよく似ている。
そのままリビングまで移動すると、珠希はキッチンで昼ご飯の支度をしていた。
カインが匂いにつられて、一声吠える。

珠希は顔をあげて、晴哉を確認すると、いつもと変わらない声で、
「あ、おかえりー」
と言った。

その一言が、どんなに欲しかったかなんて、きっと珠希は知らない。

だって、彼女の中で、家族を出迎える言葉はいつもそれで、そういう生活しか知らないで育ってきたからだ。

（お義母さん、ありがとうございます）

当たり前が欲しかった。

返ってくる言葉が欲しかった。

欲しかったのは家じゃない。

その家の中にある、妻であり、舅であり、家族であり、そしてそれを形作った人だ。

妻こそが、舅こそが、義母の仏壇こそが、自分の欲しかったものだと言ったら、珠希はきっと、その丸い目を更に丸くして、「仏壇が？！」なんて言うだろうが、義母がいたからこそこの家族があることを、晴哉は身を持って実感していた。

「今日はトロトロオムライスに挑戦してるの！」

嬉しそうな珠希を見ながら、晴哉は微笑むと、心をこめて言葉を紡ぐ。

その一言が言える相手が欲しくて、この家を手に入れた。

「ただいま」

f
i
n

エピローグ　中古住宅※嫁、舅、仏壇付（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。読んでくださった皆さんにたくさんの感謝を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5632z/

庭付き4LDK中古住宅※リフォーム済嫁付

2011年12月28日06時20分発行